

ある むぜお

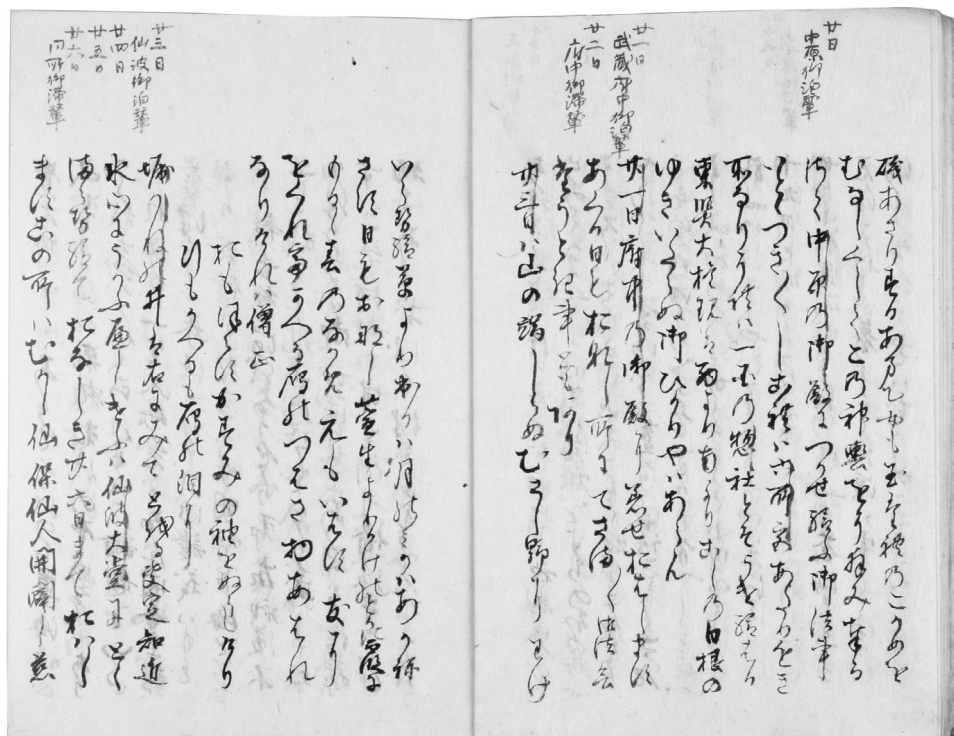
府中市郷土の森博物館だより



al museo

2017 年 12 月 20 日

No.122



元和 3 年 3 月 21 日、家康の神柩、府中へ（『日光山紀行』武蔵総社文庫・本館寄託）

もくじ

- 1-2 徳川御殿@府中
その参…家康の神柩来る
- 3 展示会案内
開館 30 周年記念 特別展 徳川御殿@府中
- 4-5 NOTE 変身！紅葉マジック
- 6 たまがわ野鳥セレクション
⑦河原の KILLER -モズ
- 7 最近の発掘調査
平安時代の横櫓が出土しました
- 8 開館 30 年を迎えての…あれこれ
③博物館は情報の蔵！でも蔵はパンク寸前

徳川御殿@府中

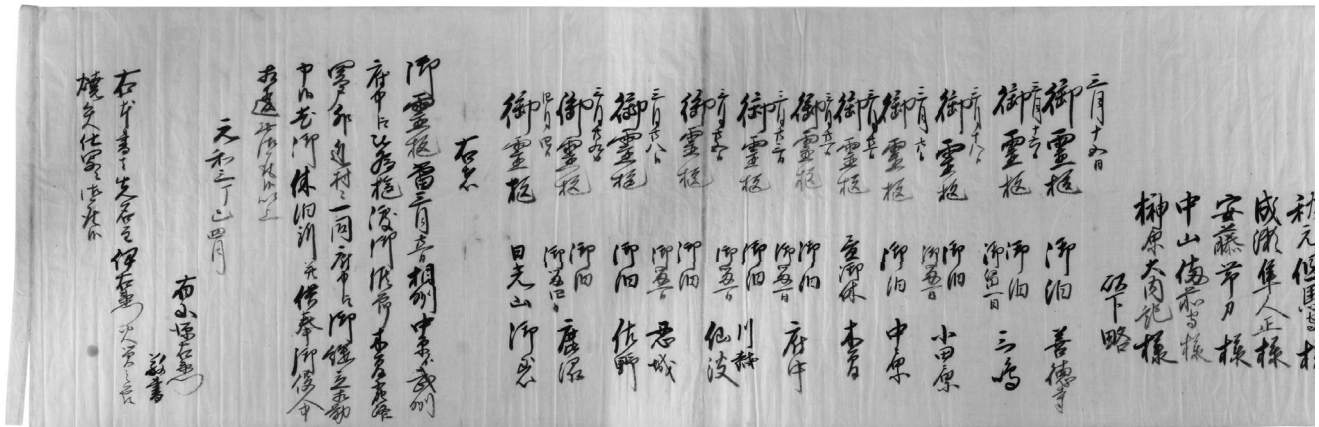
徳川將軍家は、鷹狩などの際に休憩・宿泊する御殿を各地に設けていました。その一つが府中御殿です。長らく古記録や伝承でしか知ることのできない御殿でしたが、近年の発掘でその存在が実証されました。この御殿を取り巻く話題を 4 回シリーズでお届けします。

その参…家康の神柩来る

家康が亡くなったのは元和 2 年（1616）。いったん久能山に葬られましたが翌 3 年、日光に遷されます。そのルートは、江戸を経由せず、生前の家康が鷹狩の際に用いた宿泊地をたどるように、武蔵を縦走しています。府中へは 3 月 21 日に到着。2 日泊まり、法要が営まれています。

徳川御殿@府中

その参…家康の神柩来る



霊柩の継立について記した史料（本館寄託）

表紙写真の『日光山紀行』は、『日光山御鎮座の記』などともいい、久能山（静岡市）から日光へ家康の神柩を遷すにあたって、その行列に供奉した公家・烏丸光廣が記した紀行文で、その行程をつぶさに知ることのできる稀有の史料です。

光廣は多才多芸な宮廷文化人であるとともに、後水尾上皇の厚い信任を得て、公武間の連絡役をつとめていました。公卿の中でも江戸幕府側に好意的な人物で、3代将軍・家光の歌道指南役にもなっています。『日光山紀行』でも、和歌を交えて、久能山から日光に至る沿道の名所や旧跡を紹介しています。

この『日光山紀行』によれば、家康の神柩は、元和3年（1617）3月15日に久能山を出発し、善徳寺（富士市）―三島―小田原と、東海道を通り、平塚から内陸へ入って、中原―府中―川越―忍（行田市）と武蔵を縦断して下野（栃木県）へ抜け、佐野―鹿沼を経て4月4日に日光に到着しています。

府中でのことは

廿一日 府中の御殿に着せおわします、あくる日もおなじ所にてさまざま御法会尊き事どもあり

と記しています。21日に到着し、翌日もそのまま逗留して、その間、さまざまな法会が執り行われていることがわかります。神柩が2日以上留まったのは小田原（2日）、川越（4日）、鹿沼

（4日）に過ぎません。府中に2泊した理由は分かりませんが、亡き家康の意を汲んだ結果と考えたいところです。記録はありませんが、法要に際して御殿が修造された可能性もあるのではないのでしょうか。

ところで、家康は鷹狩をたいへん好みました。秀忠に将軍職を譲って駿府（静岡市）に隠居してからは、毎年のように武蔵方面へ鷹狩に訪れていて、家康自らが認めた行程予定のメモも複数残されています。そのうち、慶長15年（1610）10～11月のものと推定される1通（徳川記念財団蔵）を見ると、善徳寺―三島―小田原―中原―府中―川越―忍・・・とあります。まるで生前の家康の鷹狩を再現するように、神柩は遷座しているのです。

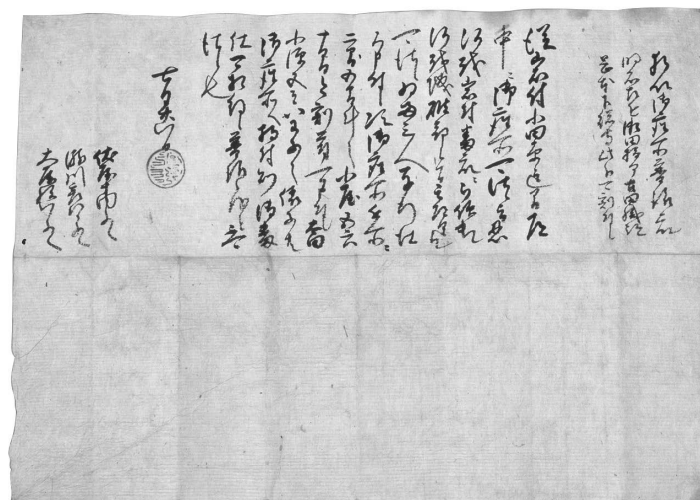
神柩遷座に関する記録は地元にも残されています。上の写真は元和3年4月に認められた文書の写しです。家康の神柩（霊柩）を日光へ遷すにあたって、中原から府中までの間の近在の村々が順繰りに人足を出していたことがわかります。当然のことながら、遷座は沿道の人々を巻き込んだ一大プロジェクトで、庶民はそれに奔走されたのでした。

なお、上の文書によりますと、家康の神柩は中原―府中間の木曾（町田市）で休憩しています。光廣が書き留めなかったローカルな情報といえそうです。（深澤靖幸）

展示会案内

開館 30 周年記念 特別展

徳川御殿 @府中



(天正 18 年) 7 月 28 日 豊臣秀吉朱印状 (大阪城天守閣蔵・提供)
秀吉が直臣の太田一吉に宛てて、岩槻(岩付)と小田原の間に「御座所」の建造を命じている。

2018

1/27 (SAT) — 3/11 (SUN)

会場：本館 1 階特別展示室

今年は府中市郷土の森博物館がオープンして 30 周年という節目の年にあたりますが、本誌表紙の連載でも述べましたように、家康の神柩が久能山から日光へ遷座してから 400 年目にもあたります。この時、家康の神柩は、府中に 2 泊し、法要が営まれたのでした。

その場所は、府中御殿。JR 府中本町駅の東隣がその伝承地です。その成立は、家康の神柩が逗留した元和 3 年(1617)から遡ること 27 年、天正 18 年(1590)のことです。小田原北条氏を滅ぼした後、奥州仕置きに向かった豊臣秀吉を饗応するために家康が建造したのだといわれています。

この伝承地で 2008 ～ 10 年にかけて発掘が行われ、伝承通り府中御殿の存在が証明されたのでした。

そもそも御殿とは立派な屋敷といった意味がありますが、徳川将軍家が江戸時代の初期を中心とした時期に、鷹狩などの際に利用した休泊施設を御殿と呼んでいました。府中以外にも、小杉(川崎市)、神奈川(横浜市)、中原(平塚市)、鴻巣(鴻巣市)、品川(品川区)、青戸(葛飾区)など、江戸近郊や東海道沿いなどに設けられていました。正確には分からないのですが、その数は 50 か所にのぼるようです。

しかし、今日、御殿跡として遺跡が明瞭に残っ

ていたり、発掘調査が行われたりしているのは、ほんの一握りです。御殿跡の考古学的研究はまだ緒に就いたばかりなのです。そしてまた、近世初頭の社会を考察するうえで重要な位置を占めるにもかかわらず、文献史学の側からの研究もそれほど蓄積されていないといつてよいでしょう。

府中御殿もご多分に漏れず、その研究は皆無に等しい状況でした。しかし、遺跡の発見(発掘)を機に、状況が大きく変わってきています。考古学的な情報が得られたことはいうまでもありませんが、文献史料を用いた研究も促されるよう進みました。なかでも、その造営者をめぐっては、家康ではなく、豊臣秀吉とする考えが提起され、大いに注目されています。

今回の特別展では、発掘資料はもとより、古文書、古記録、絵図など多様な資史料を用いて、府中御殿の成立、機能、廃絶、その後の様子などについて整理します。もちろん、府中御殿に関わる資料のみでは不足する事柄は、各地の御殿の関連資史料も用いながら、総合的に府中御殿そして御殿という施設についてアプローチしてみたいと思います。(深澤靖幸)



園内ハケ下を彩る晩秋の風物詩「紅葉」

当館は、広大な野外部分とあわせて総合的に府中の歴史・自然を紹介することで「郷土の森」と謳っています。森と言うからには、武蔵野に因んだ樹種・草花を植栽し、四季折々の景観を演出するべく、長きに亘って日常管理に力を注いできました。それだけに苦労も多く、特に寒い季節の呼び物には頭を悩ませてきました。

▼ 冬色に一石

市の花「梅」が主役の園内は、初春から多くの来館者を集めます。春が訪れると、市内浅間山を模した雑木林に咲くキンラン・ギンラン、浅間山にのみ自生するムサシノキスゲ、そして梅雨時には大量のアジサイと続きます。夏が過ぎ秋に差しかかる時期にも、ハギのトンネルや深紅の絨毯さながらのヒガンバナが彩りを添えてくれます。開館当初は、ほぼ「梅」オンリーの園内でしたが、これも長い年月の中で葛藤を繰り返してきた成果なのです…但し、ここまで。さすがに初冬から冬場にかけては咲く花も無く、辺りは灰色の景色に包み込まれてしまいます。それでも新春から咲くロウバイを植栽し、出来るだけモノトーンの期間を短縮しようと試みてきましたが、11・12

月はどうしようもありません。今時、冬に咲く園芸品種もあるのでありますが、当館は植物園ではありません。植栽については、なるべく郷土府中に関連する資料の一環として考えています。そこで気付いたのは紅葉でした。元々、園内茶室の庭や、東側の滝の上部にはカエデ科の樹木を植栽していました。西側の県木園にそびえるイチヨウなども含めて、点々と紅葉は見られていたのです。

▼ 紅葉の適所

紅葉は、落葉広葉樹が葉を落とす前に色を変化させる現象を言います。気温が8～9度に下がる頃、緑の木々の葉は変色し始めます。紅葉が鮮やかな木は、イロハモミジ・ハウチワカエデ・サトウカエデなどカエデ科の数種で、特に総称して「もみじ」と呼んでいます。紅葉の名称は、文字通り葉の色が赤く染まることに由来しますが、樹種によっては、葉の色は赤ではなく、黄色や褐色に変わるものもあります。これを黄葉・褐葉などと呼ぶ場合もありますが、総じて「紅葉」と括られています。

美しくお色直しをするためには、その樹木がどんな場所に生育するかが鍵です。条件は、昼夜の

気温差が大きい場所、平地よりは斜面、空気が澄んだ場所、適度な水分を供給できる場所が挙げられます。よく聞く紅葉の名所は、これらの条件を満たす高原や溪谷、標高の高い湖沼や滝の周辺と言った所がほとんどでしょう。また、平地であっても、広い敷地や整備された庭のある寺社・公園にも有名な場所があります。いわゆる紅葉狩りで賑わう青森県の奥入瀬や栃木県の日光、そして京都の寺社などが、これに匹敵します。

▼ 紅葉は生活戦略

さて、これらの条件が意味するものは何だと思えますか？ それは、植物が営む一番大切な仕事がかどる場所と言うことです。そうです、光合成が活発に進む場所ほど紅葉が美しいのです。その理由は、紅葉のメカニズムに隠されています。

光合成は太陽エネルギーを使って、二酸化炭素と水からブドウ糖やデンプンなどの炭水化物を合成する働きで、これを葉に含まれる葉緑体が担当します。葉緑体にはクロロフィルと呼ばれる光合成色素が含まれ、可視光線の内、青い光と赤い光を吸収するので、残った緑が発色して葉の色になっているのです。光合成の生産物は植物自身の成長活動財源となり、一部は貯蔵されて果実を付けたりします。

春～夏の間、フル回転で稼働していた生産活動にも期限があります。太陽光が弱まり、日照時間も短くなる秋口、ついに運転に支障をきたします。実は紅葉とは、葉の老化により生じる現象と言えるのです。葉自体も生産物をエネ

ルギー源にしているため、使用量が生産量を上回る事態は避けなければなりません。冬の空気は乾燥し、葉の表面から水分が蒸発することも問題です。ゆえに落葉と言う手段を取るために、まずは通常業務を停止させる合図として、物資が行き来する道に栓をするのでしょうか。老化した葉の葉柄基部に、葉と幹を分断するコルク質の離層が形成



されると紅葉へのカウントダウンです。生産物の幹への輸送路が絶たれ、一気に葉の表面には合成された糖分が溜まります。葉の方で作業打切りを示しても、日光は当たり続けます。特に紫外線が糖分を分解し、それまで存在していなかった赤い色素（アントシアン）を作り出します。これが紅葉で、好環境で多くの糖分を生産する樹木ほど鮮やかな赤色を見せてくれるのです。

因みにイチヨウのように黄色くなる黄葉ですが、こちらはクロロフィル以外に含まれる葉の色素が発色する現象です。クロロフィルは通常、分解と再生産を繰り返していますが、落葉の準備に入ると再生産が抑制され、分解だけが進むようになります。結果、光の吸収も抑えられ、緑の発色が衰えてきます。光合成活動中は見えなかったカロチノイドと呼ばれる黄色い色素が表に出てくると言うわけです。また、雑木林に多いクヌギやコナラなどは、葉の細胞が枯れ死ぬことで酸化し、単に茶色く変わる褐葉になります。



黄葉代表・県木園のイチヨウ

▼ 紅葉の指標

近年の温暖化が、紅葉を遅らせていると言うニュースを耳にします。市街地の府中は、元々遅めの紅葉でしたが、その分寒々しい冬の色に包まれる時期にグッドタイミングで華やかさが加わります。昨年、園内中央部の斜面に新たなカエデ科のもみじを植栽しました。並行して流れる小川と融合し、晩秋に新たな風情を与えてくれます。園内はまさに平地ですが、先述した適所としての条件、広大な敷地と整備された庭と言う項目をクリアしての結果です。園内の紅葉が鮮やかであればあるほど、環境整備が行き届いていることの証明にもなります。今は園内の植栽メニューに紅葉が適していることを、遅まきながら実感しているところです。紅葉は、木々の葉が華麗に変身する自然界のエンターテインメントでもあります。この不思議かつ美しい手品の種には、植物の生き残りをかけた巧みな戦略が展開しているのです。さらには、色の変わり具合で周辺環境の指標や、気候変動のメッセージが示されるなど、引き出しはまだ奥が深そうです。

やまがし野鳥せしクシヨ



⑦ー河原の KILLER ー モズ

写真提供：影山昇（府中野鳥クラブ）

この季節、多摩川には方々から渡り鳥が冬鳥として飛来します。その中心は、以前本シリーズの③でも取り上げたカモ類を主役とする、北から海を越えて来る種類です。冬鳥は、これら水鳥はもちろん、群れを成して来訪するツグミやジョウビタキ、アトリやカシラダカなども代表的です。さらに、日本国内でも山野から平地へ、つまりは高山や北方から関東以南に移動して来るタイプが混ざります。広義の渡り鳥で、漂鳥ひょうちようと言うグループですが、これらの中でよく名前が知られているのはモズでしょう。

モズは、スズメよりもやや大きく尾が長めの形態で、小さな体の割には頭が大きく、鉤形に曲がった鋭い嘴くちばしと、頑丈な足の爪が特徴です。鋭い嘴は、獲物を捕らえるための武器であり、これを使って他の鳥さえも襲うモズを称して、タカになりそこねたスズメとも表現されています。

モズは、標高 1,500 m 以下の林縁部・草原・畑地・公園・河川など、開けた場所に住み、木の枝や杭の上などに止まり、尾を上下に振り、獲物が動くのを待ちます。視界に獲物の動きを捉えると、止まり場から飛び降りて捕獲、元に戻って料理の運びとなります。同時期に渡って来たツグミやシロハラなど、自分より大型の相手に襲いかかることもあり、馬乗りで頸動脈を食いちぎり、数十秒で息の根を止めてしまうのです。まさに KILLER の形容がぴったりの暴れっぴりです。と、表向きはかなりダーティーな印象ですが、実際に彼らの食物を調べてみると、主体は昆虫食であることがわかっています。度々目にする小鳥やネズミ・モグラ・ヘビ・トカゲ・カエル・魚など、脊椎動物の摂餌は 15% 程度と言われます。特に小鳥類については、主食の昆虫が捕まりにくい冬季に多くが狙われるようです。

モズは捕らえた獲物をすぐに食べず、尖った枝

先などに突き刺します。有名なモズの「はやにえ」です。カエルやトカゲが生贄のごとく串刺しになった様子が実に残酷で、ますます KILLER のイメージが深まります。この「はやにえ」には、いろいろな見解があるようです。まずは餌の乏しい冬に備える食物の貯蔵と言う説、縄張りの境界を示すものだと言う見方もあります。但し、捕食回数に比べ、はやにえ回数が少な過ぎるという調査データがあったり、はやにえになったものとモズが食べているものとの食い違いが見られたりと、今では餌の貯蔵ではないと言う意見も増えています。他には、餌を足で押さえる代わりに尖った所に刺して固定し、これを食い残した状態だとか、満腹や好物でない獲物の処分とも言われます。ある種の遊びと考える向きもありますが、いずれにしても特徴的、かつ不可思議な生態であることには違いありません。



多摩川の魚も餌食に

この季節、枯れ木に止まって「キーキー」と秋の高鳴きで、縄張りに接近する侵入者を威嚇している様子が見受けられます。秋から冬にかけて、モズの雄は雌さえも縄張りから追い出し、単独で生活しますが、春近くなると雌を受け入れるようになります。この時に「ぐぜり鳴き」と呼ばれる、歌声のような澄んだ声を発します。一連の歌の中には、「ひろい込み」と称される、ウグイスやヒバリ、ホオジロなどの真似鳴きが挿入され、求愛行動の一環を成します。モズが漢字で「百舌」と表記される所以がここにあるのです。他に亜高山帯に生息する鳥の真似も多く含まれ、平地から姿を消している間に移動している先が推察されます。

府中では、市街地をはじめ、段丘崖にも浅間山にも姿を現しますが、多摩川でも秋から冬にかけてはコンスタントに観察することが出来ます。彼らの獲物となる小動物や魚が豊富に狙える、最適なレストランとして利用価値は高いのでしょうか。ただ近年では、さまざまな場所から飛来する鳥が多摩川を賑わせ、獲物採りのライバルも増えています。根っからの凶暴性を生かして、果たして餌競争に勝利出来るのでしょうか。

(中村武史)

平安時代の横櫛が出土しました

府中町一丁目 府中市ふるさと文化財課 塚原二郎



横櫛の出土状況

京王線府中駅北口の公共工事予定地の発掘調査で、平安時代の重複した2棟の^{たてあな}竪穴建物跡を発掘し、そのうちの1棟から炭となった^{よこぐし}横櫛が出土しました。ふつう、木材などの^{ゆうきぶつ}有機物は腐ってしまうことから、残ることはありません。今回、見つかったのは炭となっていたためです。火災により燃える中で炭となって、形が崩れることなく残った貴重な例といえます。府中市内では、火災に遭った^あ竪穴建物跡がいくつか見つっていますが、その内部には炭になった木材・焼土などが残されていることがあります。一緒にたくさんの土器が見つかることも多く、突然の火事で家財道具などを持ち出すことができなかった状況が想像できます。

日本で櫛は縄文時代から使われていましたが、現在みられるような目の細かい歯のものは奈良時代ごろには登場していたようです。市内の発掘調査は1,750か所以上に達しますが、櫛の出土は2例しかありません。そのうち1例は、^{むさし}武蔵国分寺に関わる遺跡です。武蔵国府からの出土例は、府中町で見つかった大型井戸跡からの出土で、完形の土器や多くの木製品が発掘されました。その中に横櫛がありました。この横櫛は地下水に^{ひた}浸っていたため、腐ることなくそのままの形で残っていました。

今回、出土した櫛は完全に^{たんか}炭化していたため土中にあっても腐ることなく残っていましたが、触ると崩れてしまうほど弱くなっていました。そのため櫛の正確な大きさは分かりませんが、長さが9 cm以上、幅が4 cm以上、歯の間隔は約1 mmと細かいものでした。この横櫛は誰に使われていたのでしょうか？ 竪穴建物の居住者かもしれませんが、横櫛は貴重な品ですので、その人が仕える身分のあるご婦人が使っていたのかもしれません。いずれにしても突然の火事のため、居住者は竪穴建物から着の身着のまま逃げ出すことが精一杯のことだったのでしょう。この貴重な横櫛を持ち出すことができなかった、その思いは無念であったことと思います。



府中駅前の調査地区

開館 30 周年を迎えての…



③博物館は情報の蔵！でも蔵はパンク寸前

郷土の森博物館の本館には、資料を保管するための「収蔵庫」と呼ばれる空間があります。本館 2 階常設展示室で展示しているのは、当館収蔵資料のごく一部にすぎず、多くの資料はここにあるのです。内部では、考古・歴史・民俗・自然など、府中に関係するさまざまな分野の資料が分類・整理され収蔵されています。温湿度など保存環境を確認しながら、貴重な資料を保管しているこの収蔵庫ですが、現在大きな問題をかかえています。

郷土の森博物館の前身・府中市立郷土館の開館翌年の 1969 年（昭和 44）、収蔵資料は約 5 千点でした。そこから年々資料は増えていきます。その 19 年後、新施設として郷土の森博物館が開館してから 1 年たった 1988 年（昭和 63）、民俗資料のみでも、すでに約 1 万点収蔵していました。そして、そのうちの 50 点は、開館からの 1 年間で寄贈されたものです。資料の寄贈・寄託は毎年あり、平成 28 年度だけでも 300 点以上です。資料収集を続けた結果、なんと現在、収蔵資料は全分野を総合して 11 万点を超え、収蔵スペースが不足してきているのです。

もちろん、資料 1 点の大きさはさまざまです。みこし神輿のように大型なものもあれば、はがき大の紙 1 枚の場合もあります。そのため、資料数が多いことが収蔵スペース不足に直結するとは限りません。ですが、収蔵資料が増え続けていくのですから、収蔵庫がどんどん手狭になっていくのは当然のことです。

むかしのくらしにかかわる民俗資料は、頻繁に寄贈の申し出があります。たとえば、子供のせつく節句に飾る大型のひな人形・五月人形などは、



博物館収蔵庫内部は所狭しと資料が並んでいる

すでに何組も収蔵し、展示する機会もよくあります。ですが、最近では収蔵スペースの関係から、寄贈をお断りせざるを得ないケースが相次ぐようになりました。保存状態もよく、郷土の森博物館で活用してもらえたら、というお申し出をお断りするのには、心が痛みます。しかし現状では、希少性や活用の度合いを考慮した上で、受け入れせざるを得ません。資料を寄贈いただいても、保存・活用することができず、無理に

寄贈を受ければ収蔵環境を悪化させてしまう可能性すらあるのです。

そのような状況でも、収蔵庫内の限りある空間を活用するために、棚を増設したり、箱やコンテナに資料を入れて縦積みしたりすることで収蔵スペースを確保する日々が続いています。しか

し、それすら限界が近づいてきています。

だからといって、資料の収集をやめることはできません。博物館の収蔵資料は府中の財産です。そこから調査研究の成果が次々とはもちろん、展示会など、機会のある毎に活用することで、博物館の活動も充実していきます。しかも、こうした資料は、失われたら二度と手に入らないものばかりです。数が増えたからといって廃棄することなど、あり得ません。

今後も増え続けるであろう資料を、責任をもって保存・活用していくためには、空調・防虫など、保存環境の整った収蔵庫を増設する時期になっていると思います。

博物館は、開館から約 20 年で収蔵庫の増設が検討されるべきといえます。もはや開館から 30 年が経過した郷土の森博物館は、言わずもがなでしょう。（佐藤智敬）